

第132回鶴見大学図書館貴重書展

近世都市長崎と国際貿易



平成24年10月23日(火)～11月12日(月)
鶴見大学図書館 1階エントランスホール

鶴見大学図書館

貴重書展「近世都市長崎と国際貿易」開催にあたって

長崎における貿易は元龜2年(1571)、ポルトガル人に開港されたことに始まります。この年より長崎はポルトガル船の定期寄港地となり、その後の天正8年(1580)には領主大村純忠によってイエズス会に寄進され、キリスト教布教とポルトガル貿易の中心地となりました。ところが、7年後の天正15年(1587)、豊臣秀吉は伴天連追放令を発し、翌年教会領を取り上げ、秀吉の直轄支配のもとで長崎での貿易はつづけられました。

慶長8年(1603)の江戸幕府成立後も長崎での貿易は重要視され、徳川家康は長崎を天領とし、長崎奉行を置いて監督の任にあたらせました。16世紀後半のポルトガル船による独占的な貿易体制は、江戸幕府による朱印船貿易制度の開始や、中国船(唐船)の来航の増加、さらに、オランダ〔慶長14年(1609)にはじまる〕・イギリス〔慶長18年(1613)にはじまる〕との平戸を通しての貿易の開始などによって次第に衰退していきました。また幕府のキリシタン禁制の強化によって寛永13年(1636)長崎に出島が築かれ、ポルトガル人はここに隔離されました。そして、3年後の寛永16年(1639)ポルトガル船の来航が禁止され、70年近くつづいた長崎でのポルトガル貿易は終わりをつげました。また、この間の寛永12年(1635)には、日本船渡航と外国在住日本人の帰国が禁止され、唐船の寄港地が長崎に限定されるなど、幕府のいわゆる鎖国政策が進められていきました。寛永18年(1641)平戸のオランダ商館が長崎の出島に移転させられ、長崎は唐船とオランダ船を迎え入れる唯一の開港場となり、ここにいわゆる鎖国体制の完成をみました。通常、長崎貿易とは、この鎖国体制下に長崎でおこなわれた唐船・オランダ船との貿易を指していいます。

鶴見大学図書館では、20年以上にわたってこの長崎貿易をテーマとして古文書・地図・絵図・絵画などを収集してまいりました。展示スペースの関係上、すべて展示することはできませんが、今回「近世都市長崎と国際貿易」と題して収集品の中から厳選し紹介することとしました。また、構成上必要と思われる史料を文化財学科所蔵品ならびに個人所蔵品によって補いました。解説・参考写真においては長崎市出島復元整備室・長崎市都市計画課・長崎歴史文化博物館・神戸市立博物館より御提供頂きました。各機関に対し感謝申し上げます。

平成24年10月23日

文学部文化財学科教授

石田 千尋

展示目録

※=文化財学科所蔵 * =個人所蔵

I. 国際貿易都市長崎

1. 長崎絵図 江戸時代 1舗 99.4×160.7cm
2. 新刻肥前長崎図 文政4年(1821)改(享和2年(1802)原版) 文錦堂板 1舗
65.8×87.7cm
3. 出嶋阿蘭陀屋舗景 安永9年(1780) 富嶋屋文治右衛門板 1舗 41.7×56.8cm
4. 大坂ヨリ長崎迄船道名所図絵 江戸時代中期 1巻 17.2×458.9cm
5. 長崎港図 江戸時代後期 文錦堂板 1枚 31.6×45.0cm
6. 長崎警備略図版木 江戸時代 1枚 21.2×38.4cm
7. 紅毛渡り名鳥 歌川国員画 江戸時代後期 1枚 37.3×25.6cm
8. 阿蘭陀人遠眼鏡 江戸時代後期 大和屋板 1枚 44.3×16.0cm
9. 唐美人図 江戸時代後期 大和屋板 1枚 44.3×16.0cm
10. * 長崎聞見録 広川獬著 5巻5冊 寛政12年(1800)刊行 25.8×18.2cm

II. 書籍にみるオランダ船貿易と唐船貿易

11. 長崎土産 磯野信春著・画 1巻1冊 弘化4年(1847)刊行 大和屋板 23.0×15.7cm
12. 紅毛雑話 森島中良著 5巻5冊 天明7年(1787)刊 22.6×15.7cm
13. 六物新志 大槻玄沢訳考 杉田伯元校訂 2巻2冊 天明6年(1786)序 木村兼葭堂板
26.1×17.9cm
14. 清俗紀聞 中川忠英監修 13巻6冊 寛政11年(1799)刊 26.2×18.3cm
15. 物類品隲 平賀源内編著 本文4巻・図絵1巻・附録1巻、計6巻6冊 松籟館蔵板
宝暦13年(1763)刊 27.0×18.3cm
16. 増補華夷通商考 西川如見著 5巻5冊 宝永5年(1708)刊
梅村弥右衛門・今井七郎兵衛刊行 22.3×15.6cm

III. 唐船・オランダ船の染織輸入

17. ※唐方反物切本 文政11年(1828)1月 1冊 26.9×19.2cm
18. 本方切本帳 嘉永2年(1849)8月 1冊 27.7×19.5cm
19. 唐方切本帳 嘉永5年(1852) 1冊 27.5×19.8cm
20. 長崎地役名人数・同地役人受用 [天明元年(1781)] 1冊 13.3×19.0cm
21. 紅毛持渡 小羅紗類 享保2年(1717)~寛政9年(1797) 1冊 31.3×22.4cm
22. 長崎諸役人分限帳 文政8年(1825)10月 1冊 10.0×25.0cm
23. 御用御詔切本 文政7年(1824)~天保7年(1836) 1冊 27.3×19.8cm
24. [辰紅毛船持渡端物切本帳] [天保3年(1832)] 1冊 13.5×38.6cm
25. [反物切本帳] [嘉永期(1848~1854)] 1冊 13.2×38.5cm

IV. 幕末開国期の長崎と日蘭貿易

26. 長崎居留場全図 鄰華堂版 慶応2年(1866) 1舗 67.5×90.5cm
27. 相對買之品銀高覚帳 安政5年(1858) 1冊 12.0×17.5cm
28. 〔会所差紙 已阿蘭陀五番船〕 安政4年(1857)11月7日 1枚 32.0×15.2cm
29. 〔会所差紙 已阿蘭陀五番船〕 安政4年(1857)12月4日 1枚 32.8×14.9cm
30. 〔会所差紙 未阿蘭陀船〕 安政6年(1859)3月21日 1枚 31.2×14.3cm

解 題

I. 国際貿易都市長崎

いわゆる鎖国体制下において、長崎は海外－オランダ・中国(唐)－に対して公に開かれていた江戸幕府直轄都市であった。この長崎を舞台として展開したオランダ船貿易と唐船貿易は、物の取引だけでなく人や情報・学問などの交流を生みだした。近世日本において長崎は他所にはみられない異国情緒たどる国際貿易都市であった。オランダ人に対しては出島が、中国(唐)人に対しては唐人屋敷が居留地としての役割を果たした。また町政は、長崎奉行の監督のもと町年寄の自治によって運営され、長崎貿易および都市長崎の市政上の勘定的業務は長崎会所が掌っていた。

ここでは国際貿易都市としての特徴を示す江戸時代の長崎の地図や、当時長崎の土産物であった長崎版画などを紹介する。

1. 長崎絵図 江戸時代

長崎領(天領)を中心に、内町・外町・田地・道筋・海川を色分けして示し、さらにオランダ船・唐船の長崎入港ルートや、長崎港の警備地(番所)と警備対象地域間の距離等を記した絵図。本図は、江戸幕府が唯一海外に向けて開いていた国際貿易都市長崎にとっての重要事項を明示した絵図となっている。

2. 新刻肥前長崎図 文政4年(1821)改(享和2年(1802)原版) 文錦堂板

長崎版元の一つ文錦堂板の長崎市街図。出島オランダ商館や唐人屋敷・荷物蔵、さらに港内にオランダ船・唐船を強調して描いていることが、貿易都市長崎の地図の特徴といえよう。なお、この図は藍、黄二色とその重色で、筆彩は加えられていない。

3. 出嶋阿蘭陀屋舗景 安永9年(1780) 富嶋屋文治右衛門板

長崎勝山町富嶋屋文治右衛門板の灰色合羽刷長崎版画の出島図。当時の出島内の建物の配置が正確に描かれている。富嶋屋(伝吉)は、はじめ豊嶋屋と称し、数多くの長崎の異国情緒豊かな題材を選んで板行し人気を得ていた。この図は豊嶋屋として板行された後にもとの板木の「豊」を「富」にかえてそのまま刷りつづけたものであり、現存するものは非常に少ないといわれている。

4. 大坂ヨリ長崎迄船道名所図絵 江戸時代中期

大坂から瀬戸内海・玄界灘を経て長崎・平戸・五島列島に至る航路を描いた図絵。さらに、この図絵は航路を主題としながらも、四国の北岸および九州北半を圧縮しておさめており、各地の名所や城郭についてもその状況が丹念に描かれ、大和絵風の着色が施されている。今回展示した部分は、唐津から巻末の五島列島までであるが、「てしま」(出島)が六角形の白壁で包まれた城郭になっているのが興味深い。

5. 長崎港図 江戸時代後期 文錦堂板

木版多色摺の浮世絵版画の技法を取り入れた色彩豊かな文錦堂板の長崎港図。画面下方に出島、その左側に新地荷物蔵・唐人屋舗が描かれ、湾内にはオランダ船と唐船が大きく、数多くの使役船が小さく描かれている。長崎領の陸地側から港を俯瞰した典型的な長崎港図。

6. 長崎警備略図版木 江戸時代

長崎港の警備を主題とした絵図の版木。長崎港の防衛ラインとその距離を記すとともに、警備地(番所)を口、遠見番所を×、台場を●印で強調して示しているところが特徴といえる。また、本図は斜線で示した長崎市街を中心に、長崎の主要施設、地名を記し、オランダ船・唐船の長崎入港ルートを矢印で表している。

7. 紅毛渡り名鳥 歌川国員画 江戸時代後期

オランダ船によって輸入された「^{くにかず}鸚鵡鳥」をはじめとする10種の鳥を描いた木版多色摺の浮世絵版画。江戸時代後期、象や駱駝などの珍獣と同様、奇鳥の見世物も喜ばれた。大坂を版元とする歌川国員による同じ版画で、大夫元(興業主)の部分で「大夫元 勢州松坂鳥屋熊吉」としているものがある。おそらく大坂での名鳥興業宣伝のものとして作成された版画そのものが好評となり、後に訂正増刷りされたのがこの版画と思われる。

8. 阿蘭陀人遠眼鏡 江戸時代後期 大和屋板

オランダ人が遠眼鏡を覗いている様子を描いた大和屋板の長崎版画。遠眼鏡verreki jkerはオランダ船の輸入品であり、特に注作品として多く輸入されている。商館長らしきオランダ人、遠眼鏡(望遠鏡)、中国風の意匠を凝らした四脚の椅子、オランダ国旗にアルファベットなどは異国情緒をさそうものとして長崎の土産物にはうってつけだったのであろう。

9. 唐美人図 江戸時代後期 大和屋板

中国の美人を描いた大和屋板の長崎版画。江戸時代、長崎に来航した唐船は貿易を目的としたもので、女性が乗船してきた例は元禄15年(1702)の「女唐人甘祖」の渡来以外ほとんど知られていないことから、おそらく唐船によってもたらされた絵画などから写されたものと思われる。

10. 長崎聞見録 広川獬著 寛政12年(1800)刊行

京都の医師広川獬は、寛政年間(1789~1801)に長崎に二度来遊し、その滞在期間は前後足かけ6年におよんだ。その間、長崎の風俗・習慣や外国(オランダ・中国)の文物に大変興味を持ち、それらのことを『長崎聞見録』で詳細に紹介した。ここでは、「唐船の畧圖」(巻之二)と「阿蘭陀船之圖」(巻之四)を掲げておく。

II. 書籍にみるオランダ船貿易と唐船貿易

オランダ船・唐船が輸入した国際色豊かな品々は、当時の国際的商品流通において、近世日本の位置を明らかにするものといえる。オランダ船・唐船の輸入品はそれぞれの通商圏を明らかにするものであり、同時に当時の日本文化・社会・経済に少なからず影響を与えていたといえる。

ここでは江戸時代に刊行された書籍にみられる貿易品や貿易にかかわる施設、人物図などを紹介する。

11. 長崎土産 磯野信春著・画 弘化4年(1847)刊行 大和屋板

長崎に関する図録を中心とする地誌。著者の磯野信春は浮世絵師溪斎英泉の門人。本書は諏訪神社・眼鏡橋・大波止などの名勝やオランダ正月などの風俗も記すが、多くは唐館・蘭館・唐寺・唐船・蘭船などの唐・蘭関係のもので占められている。今回展示した部分は、「紅毛人(オランダジン)」の画であるが、ここにはuurwerk(時計)やガラス器・鳥などオランダ船舶載品の数々をみることができる。

12. 紅毛雑話 森島中良著 天明7年(1787)刊

本書は、中良の兄桂川甫周が江戸参府^(註)のオランダ商館長を宿舎長崎屋に訪ねて質疑応答した事柄や、蘭学者の間で話題になった外国奇聞などを記したものであり、蘭学草創期における白眉の啓蒙書といわれている。今回展示した部分は、「ミコラスコーピユン之図」であるが、microscopium(顕微鏡、当時は「虫めがね」と訳された)は19世紀に入ると日本人の注文でオランダ船によって、わかっているだけでも17台輸入されている。

(註) 江戸参府：オランダ人が通商を免許されていることの御礼のため、将軍に謁見して贈物を献上する行事。

13. 六物新志 大槻玄沢訳考 杉田伯元校訂 天明6年(1786)序 木村蒹葭堂板

当時蘭学者の間で関心の高かった、一角(ユニコウル)・泊夫藍(サフラン)・肉豆蔻(ニクズク)・木乃伊(ミイラ)・噎蒲里哥(エブリコ)・人魚の6種の薬物について考証した著作。ここに紹介したサフランはオランダ船によって多く輸入された薬種の一つである。なお本書のサフランの挿絵は、ドドネウスの『草木誌』から写されたものと考えられる。

14. 清俗紀聞 中川忠英監修 寛政11年(1799)刊

本書は、長崎奉行の中川忠英が監修者となって中国清朝乾隆時代(1736~1795)ごろの福建・浙江・江蘇地方の風俗慣行文物を長崎に渡来した清国商人から聞き、具体的な絵図をつくって和漢混淆文で解説したものである。ここに紹介した天后廟は、航海の女神天后聖母をまつる廟であるが、長崎の唐人屋敷内にも天后聖母(媽祖)を祀る天后堂が設けられていた。

15. 物類品^{ぶつるいひんしつ}鑑 平賀源内編著 松籟館蔵板 宝暦13年(1763)刊

本書は、宝暦7年(1757)以降、田村元雄・平賀源内・松田長元たちの主催によって開かれた5回の薬品会(物産会)出品物の中から外国産のものを含めて360種を選び解説した著

作。今回展示した「産物図絵」巻5の甘草は、唐船だけでなく蘭船によっても多く輸入された薬種で、痰切薬や諸薬の合薬とされた。中国では南京・陝西・河東・山西の諸地方に自生するものが上品とされていた。

16. 増補華夷通商考 西川如見著 宝永5年(1708)刊 梅村弥右衛門・今井七郎兵衛刊行
本書は、長崎に輸入された貿易品の産地を地誌風に略述した著作。初版は元禄8年(1695)刊で上下2冊であったが、その後全体の記述を詳しくし、地図・人物・外国船などの図の他、欧米諸国についての記述も加えて宝永5年に増補版が刊行された。本書はわが国の本格的な外国地理書の先駆をなすものといわれている。

Ⅲ. 唐船・オランダ船の染織輸入

唐船・オランダ船の輸入品は、各種の手続きを経た後、日本側の役人である目利^{めきき}によって鑑定・評価され、国内市場にもたらされた。輸入反物に関しては、反物目利と呼ばれる役人によってその職務が果たされた。この反物目利および五ヶ所商人によって輸入反物の裂を貼り込んだ「切本帳」と称する史料が作成され、現在各所に所蔵されているが、これらは、端切れではあるが近世の輸入反物の実物を確認できる貴重な史料といえる。

17. 唐方反物切本 文政11年(1828)1月

文政10年(1827)に長崎港に入津した唐船2艘〔亥九番船(寧波出港船)・同拾番船(南京出港船)〕の輸入反物の切本帳。この切本帳は「子壺番割」すなわち文政11年の1回目の長崎会所と五ヶ所商人との取引にかけられた反物類の裂を貼り込んだものである。この切本帳は反物目利によって作成されたと考えられるが、反物目利名を記したと思われる表紙左下の部分が破り取られているのが残念である。反物目利作成の切本帳は、主に価格評価のために作成されたものであり、その他、商人荷見せや荷渡し等の際に現物と照合するためのものであったと考えられる。今回展示した「縞子」は中国産の本絹の練糸^{しゆす}を使用した本縞子。

18. 本方切本帳 嘉永2年(1849)8月

嘉永2年に長崎港に入津した唐船3艘(西式番船・同三番船・同四番船、全て南京出港船)の輸入反物の切本帳。この切本帳に貼り込まれた反物類は「三番割」すなわち嘉永2年の3回目の長崎会所と五ヶ所商人との取引にかけられた。この切本帳は反物目利によって作成されたと考えられるが、反物目利名を記したと思われる表紙左下の部分が破り取られているのが残念である。

19. 唐方切本帳 嘉永5年(1852)

嘉永4年(1851)に長崎港に入津した唐船3艘〔亥式番船(南京出港船)・同三番船(寧波出港船)・同四番船(寧波出港船)〕と嘉永5年に同じく長崎港に入津した唐船1艘〔子壺番船(寧波出港船)〕の輸入反物の切本帳。この切本帳は「子壺番割」すなわち嘉永5年の1回目の長崎会所と五ヶ所商人との取引にかけられた反物類の裂を貼り込んだものである。この切

本帳は商人「村上」によって作成されたものであり、反物裂が貼付され、取引名目・品名・反数・会所買入価格・落札価格・落札商人名等が記されている。今回展示した「呉羅服連」は経緯の糸込みが22本前後(1cm間)のかなり均一な平織の起毛のない毛織物。原産地はヨーロッパ。唐船輸入の毛織物はイギリス産のものが多い。

20. 長崎地役名人数・同地役人受用 〔天明元年(1781)〕

長崎の地役人構成・人名を記す「分限帳」の一種であり、天明元年に長崎奉行所に着任した柘植長門守が受け取った分限帳を天明3年(1783)6月に写し取ったものである。今回展示した部分に史料21の作成者である「端物目利 岸村伊三太」の名がみえる。

21. 紅毛持渡 小羅紗類 享保2年(1717)～寛政9年(1797)

寛政8年(1796)に、享保2年以降オランダ船が輸入した「小羅紗」裂を色別に貼り、裂のない年には注記を施し、輸入小羅紗を時系列的に確認し、オランダ船に対する注文に役立てるために作成されたものと考えられる。その内容は寛政9年にまで及ぶ価値の高い実戦的な現物史料である。作成者は反物目利の岸村伊(猪)三太〔在職：安永9年(1780)～文化13年(1816)〕。なお、小羅紗は経糸2本ごとに緯糸を通した三枚綾織の毛織物。原産地はヨーロッパ。

22. 長崎諸役人分限帳 文政8年(1825)10月

長崎の地役人構成・役料・人名を記す文政8年の「分限帳」。今回展示した部分に史料23の作成者の一人と考えられる「端物目利 山本甚左衛門」の名がみえる。

23. 御用御詔切本 文政7年(1824)～天保7年(1836)

文政7年から天保7年までの将軍の注文品である御用御詔物としての反物の内、入用分を除いて取引にかけられる反物の裂を貼り込んだ切本帳。輸入年と反物名・反数・幅・長・元・拂が記され、それに相当する実物の裂が貼り込まれている。作成の主目的は長崎会所で五ヶ所商人等を相手に取引にかける際の手元資料とするためであったと考えられる。作成者は反物目利の山本甚左衛門〔在職：享和元年(1801)～天保4年(1833)〕と善右衛門〔在職：天保4年(1833)～天保14年(1843)〕の二代にわたって作成されたものと考えられる。今回展示した「弁柄更紗」「い更紗」はヨーロッパで作製されたインド更紗の模造品であり、両者共に上質の木綿にプリントされた二色更紗。

24. 〔辰紅毛船持渡端物切本帳〕 〔天保3年(1832)〕

表紙はなくなっているが、東京国立博物館に同じ内容の天保3年(1832)の切本帳があることより、反物目利作成の「〔天保三年 辰紅毛船持渡端物切本帳〕」とみることができると考えられる。今回展示した「大羅紗」は羊毛で地が厚く織(平織)の組織がわからないほど毛羽立たせた毛織物。原産地はヨーロッパ。「呉呂服連」については、史料19の解説参照。

25. 〔反物切本帳〕 〔嘉永期(1848～1854)〕

表紙はなくなっているが、現存する各所の切本帳から判断して反物目利によって嘉永期

に作成された切本帳と考えられる。今回展示した「奥嶋」は経糸・緯糸共に二本ずつ引揃えた双糸を用いて平織にしたいわゆる斜子地^{ななこ}で細い綿糸を用いて織りあげた密な地合としなやかさ、滑らかな光沢をもつ綿織物。奥嶋は本来インド産であるが、当時はすでにヨーロッパ産(模造奥嶋)が日本に輸入されており、本品は染料のあでやかさからからみてヨーロッパ産と考えられる。「老番尺長上皿紗」は、ヨーロッパ独自の意匠によってアリザリンレッドやクロムイエローのようなあざやかな色彩を用いた花柄のプリント更紗。

IV. 幕末開国期の長崎と日蘭貿易

幕末開国期の長崎は「鎖国」期の様相を次第にかえつつあった。特に正式に英・米・蘭・露・仏との通商条約が発効する安政6年(1859)6月以前において、既に相当数の外国船が入港して貿易がおこなわれた。

また、それ以前の安政2年(1855)には、日米・日露・日英の和親条約と同じ権益をオランダ人にも与える必要から日蘭和親条約が調印され、貿易に関しては従来の「振合」(状況)によることとされた。その後、この条約が批准された安政4年8月29日(1857年10月16日)、同じ日付で日蘭追加条約が調印され、貿易では従来の会所貿易の形態が温存された。しかし、具体的な取引においては、脇荷商法(私的商品の取引方法)を拡大する形がとられた。すなわち、オランダ船の輸入品は長崎会所において直接商人が入札をおこない、その代料もしくは「代り品」は落札商人から会所に納められ、商人に差紙(商品切手)が発行され、それをもって商人は出島で商品を受け取った。

26. 長崎居留場全図 鄰華堂版 慶応2年(1866)

開国後、慶応2年の長崎居留地を俯瞰した木版多色摺の図。居留地の等級が色分けされており、黄を上等、青を中等、赤を下等として示している。海に面している出島や大浦、下り松近辺は上等地となっている。また、長崎港に外国から来港した蒸気船が描かれている点など、開国以前の長崎港図(史料1、2、5、6)との違いをみてとることができる。

27. 相對買之品銀高覚帳 安政5月(1858)

本史料は、長崎地役人の唐人番であった城(元之進もしくは倅の左七郎)が控えとして安政5年1月22日から10月25日までの日蘭貿易における取引(「相對取引」)を記した帳面。本史料の冒頭には日本商人が長崎会所から受け取った差紙(商品切手)の雛形を記している。次に掲げる史料28、29、30は、この雛形を忠実に守って作成されている。

28. [会所差紙 已阿蘭陀五番船] 安政4年(1857)11月7日

已阿蘭陀五番船すなわち安政4年に阿蘭陀船として5番目に入港した船が輸入した痰切drop^(註)の取引に関する差紙。荷主のオランダ人イアゲハスレイ^(註)の痰切30斤を、酒屋町鮫屋卯八と銅座跡八代屋茂三郎が連名で銀450目で落札購入しており、長崎会所の役人がその売買を確かなものにする裏書き(保証)をしている。

(註)・痰切drop：乾燥した甘草の根を蒸留してとるエキス。すなわち甘草エキス。あめ玉状に固めて粒にしたもの。咳止め・去痰薬。

- ・イアゲハスレイ：I. A. G. A. L. Basslé, Pakhuismeester, Boekhouder en Scriba bij de Nederlandsche factorij te Desima出島オランダ商館の荷蔵役兼簿記役兼筆者頭。

29.〔会所差紙 巳阿蘭陀五番船〕 安政4年(1857)12月4日

巳阿蘭陀五番船すなわち安政4年に阿蘭陀船として5番目に入港した船が輸入した藤(籐)rotting^(註)の取引に関する差紙。荷主のオランダ人イアゲバスレイの藤403,730斤を、原久平と伊万里屋與兵衛が連名で銀605貫595匁で落札購入しており、長崎会所の役人がその売買を確かなものにする裏書き(保証)をしている。

(註) 藤(籐)rotting：rottingは籐づえ。藤(籐)は、やし科の蔓性木本。マライ語でrotan。船綱に編み、モッコ(編目に編んだ担荷用の農具。鉾山で鉾石を担いだすにも用いた)などにもつくった。

30.〔会所差紙 未阿蘭陀船〕 安政6年(1859)3月21日

未阿蘭陀船すなわち安政6年に入港した阿蘭陀船が輸入した皿紗citsen^(註)の取引に関する差紙。荷主のオランダ人ポルスプル^(註)の皿紗41反(32反に修正)を、銀屋町の亀屋□□^(虫損)が7貫500目(5貫760目に修正)で落札購入しており、長崎会所の役人がその売買を確かなものにする裏書き(保証)をしている。

(註)・皿紗citsen：綿布を花鳥・人物・幾何学紋様等、種々様々な文様に染め分けたもの。輸入時期からみてヨーロッパ産と考えられる。

- ・ポルスプル：D. de Graeff van Polsbroek, Assistent der 2de. klasse bij de factorij voor den Nederlandschen handel op Japan出島オランダ商館の2等補佐官。ポルスブルックPolsbroekは後に、副領事、総領事、公使として幕末・維新期に活躍した駐日オランダ外交官。

参考文献

- ・長崎市出島史跡整備審議会編『出島図』（中央公論美術出版、1987年）
- ・国際地理学会他編『日本の地図』（国立国会図書館、1980年）
- ・山本光正『街道絵図の成立と展開』（臨川書店、2006年）
- ・古賀十二郎『丸山遊女と唐紅毛人』後編（長崎文献社、1969年）
- ・山脇悌二郎『近世日本の医薬文化』（平凡社、1995年）
- ・山脇悌二郎「スタト・ティール号の積荷－江戸時代後期における出島貿易品の研究－」（『長崎談叢』第49輯、1970年）
- ・石井孝『日本開国史』（吉川弘文館、1972年）
- ・神戸市立博物館編『鎖国・長崎貿易の華』（1994年）
- ・神戸市立博物館編『日蘭交流の架け橋』（1998年）
- ・たばこと塩の博物館編『おらんだの楽しみ方』（2008年）
- ・長崎県史編集委員会編『長崎県史』対外交渉編（吉川弘文館、1986年）
- ・石田千尋『日蘭貿易の史的研究』（吉川弘文館、2004年）
- ・石田千尋『日蘭貿易の構造と展開』（吉川弘文館、2009年）
- ・石田千尋「近世日本と国際的商品流通の展開－嘉永2年、長崎貿易における染織輸入－」（箭内健次編『国際社会の形成と近世日本』日本図書センター、1998年）
- ・石田千尋「十八世紀の蘭船毛織物輸入と切本－「従享保二酉年至寛政七卯年 紅毛持渡小羅紗類」の紹介を兼ねて－」（『鶴見大学紀要』第38号第4部、2001年）
- ・石田千尋「天保期の分限帳－史料紹介 長崎県立長崎図書館所蔵「分限帳」－（下）」（『鶴見大学紀要』第41号第4部、2004年）
- ・石田千尋「御用御詔物としての染織輸入－「御用御詔切本」の紹介を兼ねて－」（『鶴見大学紀要』第48号第4部、2011年）
- ・丹羽漢吉校訂『長崎虫眼鏡・長崎聞見録・長崎縁起略』（長崎文献社、1975年）
- ・孫伯醇・村松一弥編『清俗紀聞』（平凡社、1966年）
- ・宗田一解説『六物新志・稿／一角纂考・稿』（恒和出版、1980年）
- ・菊池俊彦解説『紅毛雑話／蘭畹摘芳』（恒和出版、1980年）
- ・杉本つとむ解説『紅毛雑話・蘭説弁惑』（八坂書房、1972年）
- ・杉本つとむ解説『物類品隲』（八坂書房、1972年）
- ・日蘭学会編『洋学史事典』（雄松堂出版、1984年）
- ・国史大辞典編集委員会『国史大辞典』全15巻（1979～1997年）

付記

今回の展示に際して、品川区立品川歴史館学芸員の富川武史氏（文化財学科1期生）に協力を得ました。記して謝意を表します。

